

ステップアップ調査モデル実施校における成果報告について

1 モデル実施の経緯

一人ひとりの学力やよさを伸ばすためには、学力の「伸び」を経年で測定し、そのデータをエビデンスとして、授業改善及び個に応じたきめ細かい指導に生かすことが有効であり、ステップアップ調査は、学力の「伸び」を測定できる調査である。本調査を本市で全校展開するにあたっての課題を明らかにするため、令和3年度より2中学校区（中学校2校・小学校4校）で3年間モデル実施をした。

2 モデル実施の方法と特長

(1) 調査方法

対 象：モデル校（6校）の小学4年生～中学3年生

酒匂中学校区：酒匂中、酒匂小、富士見小

泉中学校区：泉中、富水小、東富水小

調査内容：国語、算数・数学、質問紙

実施時期：4月～5月（指定期間内から学校事情に合わせ学校が実施日を決定）

(2) 調査の特長

- ・平均と比べない、一人ひとりの「伸び」を経年で把握する。
- ・学力の伸びに大きく関係する「非認知能力」「学習方法の習得」「主体的・対話的で深い学びの実施」「学級学年経営」について質問紙で把握する。

3 調査結果の概要

- ・全ての学年・教科で、学年が上がるごとに着実な学力の伸びが見られることが把握できた。
- ・国語については約7割の児童生徒の学力が伸びている。
- ・算数・数学については約6～7割の児童生徒の学力が伸びている。
- ・学級風土（クラスの雰囲気・先生や友達との人間関係）について約9割の児童生徒が肯定的な回答をしている。

4 教職員の調査実施に対する感想や要望

感想には、調査結果を踏まえて指導する際に**意識するようになった点**や、児童生徒の状況に対する**効果的な取組**などが記載された。一方で、要望には、教職員や児童生徒の負担軽減をはじめとする、調査実施に係る**業務の効率化や精選**に関する内容が多く寄せられた。

(1) 調査実施に対する感想例

- ・教職員が非認知能力に着目するようになった。一人ひとりの見とりも、そうした非認知能力（粘り強さ・自制心など）に着目することが多くなった。
- ・調査において、学年や一人ひとりの伸びや傾向がはっきりするため、児童への見とりを大切にし、その子にあった形で学習できるように教職員で心がけることができた。
- ・教職員が結果から分析したことをもとに手立てをうつことができたため、その適切な支援やことばかけによって児童のやる気を高めることができている。特に国語では、児童のやる気の創出と共に前年度からの大きな伸びを見ることができた。
- ・勉強が苦手な子が、伸びた自分に喜び、学習に関するアドバイスを読む様子が見られた。
- ・中学校区全体の状況について理解を深める資料としてとても良い調査であった。本中学校区では、どの学年も共通して中間層の伸びが低くなる傾向にある。そうした傾向を共有し協議することで、小中の連携が深まった。また、小学校から中学校への引き継ぐときの資料としても有効であったと実感している。

(2) 調査実施に対する改善・要望例

- ・ステップアップ調査の準備・事後処理をスムーズにできるようにしたい。調査の個人番号と結果の紐付けが、非常に大変（特に中学1年）である。名前と個人番号が紐付けした状態で、エクセルファイルと個人番号シールを配付してほしい。
- ・分析に時間と手間がかかるので、そのための時間の設定が必要である。夏季休業中に結果が分かれば、それに合わせて研修や作業を行う日を夏季休業中に設定することができる。
- ・データの量が膨大でわかりづらく分析に大変時間がかかる。教育委員会が資料を作成したことで対応できたが、学校単独での対応となるとかなり厳しい。
- ・全国学力・学習状況調査もある中で生徒、職員の負担増が大きい。生徒にとってはステップアップ調査の方がメリットは大きいので、何らかの方策を取ってほしい。

5 保護者アンケート結果概要

- ・学力の伸びの状況について
⇒「わかった」「だいたいわかった」の肯定的回答＝88.4%
- ・個人結果票に記載されている学習のアドバイスについて
⇒「わかった」「だいたいわかった」の肯定的回答＝85.5%
- ・調査結果を受けて、家庭で子どもと話をした内容について
⇒「昨年度からの学力の伸びについて」「調査結果に書かれている学習に関するアドバイスについて」「今後の各教科の勉強方法について」などの回答が多数
- ・その他感想等の自由記述では
回答の62%が肯定的意見（右参照）

<調査に対する肯定的な意見の例>

- ・ステップアップ調査をすることにより、昨年からの学力の伸びを本人が確認でき、次への頑張り（意欲）につながっているようです。
- ・自分が頑張った分、成長が目に見えて理解できたので日々の勉強に生かせるようになってきました。

保護者アンケートの結果から、個人結果票の返却を通して、学力の伸びが分かる良さを感じている保護者が多くいることが分かる。同時に、児童生徒のやる気の創出や、学習に係る親子のコミュニケーションの機会の提供にもつながっている。

6 モデル実施の成果

成果として4点にまとめた。モデル校ではPDCAサイクルを回し、授業や指導の改善や工夫を行うことで、一人ひとりの学力の伸びを促すことができた。調査結果から指導改善・工夫をした具体例を別表にまとめた。

(1) 教職員の意識の変容

学習内容の習得だけではなく、「非認知能力」をはじめとする様々な要素を大切にして児童生徒一人ひとりを伸ばす意識が、モデル校の教職員に広がってきたことは大きな成果の1つである。(ケース①)

(2) 児童生徒に合った指導や声かけ

児童生徒の結果の詳細に応じた言葉かけをしたり、個別に具体的な支援や指導方法を検討したりし、PDCAを回す例が報告されている。(ケース②・③)

(3) 児童生徒の意欲の創出

学力が高い・低いに関わらず「伸び」が見られた児童生徒にとっては手ごたえを得ることができる。その手ごたえや「伸び」の様子から意欲を引き出す工夫をし、学習指導に生かすことで効果を上げることにつながっている。

(ケース④)

(4) 小中で連携した指導の実施

同一集団を経年で調査することによって、その学年の児童生徒について小学校教職員と中学校教職員が学力の状況等を共有し、中学校区全体としての取組を強化することができた。

	注目した結果データ	指導改善例	成果例
ケース①	「主体的・対話的で深い学びの実施」について数値が低い ⇒質問紙の肯定的回答 3.7 (5段階評価の平均値) 友達は自分のことを認めてくれる ⇒質問紙の肯定的回答の割合 79.2%	・主体的に学べるよう児童生徒自身の「問い」の設定 ・対話しやすい学級経営の工夫	「主体的・対話的で深い学び」の伸びの実現 ⇒質問紙の肯定的回答 4.1 (5段階評価の平均値) 友達は自分のことを認めてくれる ⇒質問紙の肯定的回答の割合 89.3%
ケース②	「学力が高くても伸びてない子」 Bさん 学カレベルの伸び ⇒(国)±0 (数)±0	・人間関係の改善・長期的な目標を立て進める学習法の指導	昨年度学力を伸ばせなかった子の学力向上 Bさん 学カレベルの伸び ⇒(国)+1 (数)+2

ケース③	<p>学力層毎の伸び 「中間層が伸びていない」 ⇒ Aさん学力レベルの伸び (国語) ±0 (数学) +1</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学級集団の人間関係の把握 ・生徒間の協働による学びの充実 	<p>中間層の学力の向上 ⇒Aさん学力レベルの伸び (国語) +3 (数学) +3</p>
ケース④	<p>学年の国語の力をもう少し伸ばしたい 国語で学力を伸ばした子の割合 53.1%</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・センテンスカード等を使った文章構成の指導 ・誰でも参加できる発問の工夫 (学習意欲の創出) ・自分の力を伸ばす努力調整方法の指導 (やる気を引き出す声かけ) 	<p>国語の学力向上 国語で学力を伸ばした子の割合 79.2%</p>

7 モデル実施の課題

(1) 全国学力・学習状況調査との重なりによる負担

小学6年生及び中学3年生は、全国学力・学習状況調査の実施から約1か月後に本調査の実施となる。特に中学3年生は、短期間に2度の調査を行うことにより年度初めの授業実施に支障があった。

(2) 中学3年生の調査結果の活用について

結果の返却・結果を活用する研修会が9月、実際に授業や指導に生かすのは10月以降となることから、調査結果を生かす期間が中学3年生は極端に短い。

(3) 教員の負担

マニュアルの共有、調査資材の受け取り・確認、調査の準備・配付、回答や問題用紙の回収等、調査実施の事前事後に教員の負担が大きい。

(4) 提供される帳票の読み取りや分析

学校へ直接送付される帳票の量が膨大で、必要部分の抽出が難しく、各校各学年で結果を活用するには、提供されたデータをさらに加工する必要があった。

8 令和6年度以降の実施について

モデル実施において、児童生徒への指導等に高い効果が認められたことから、課題を改善しながら全校で展開することとする。

(1) 実施方法

- ・全小中学校で、2教科 (国語、算数・数学) と質問紙の実施
- ・小学4年生から中学2年生までを対象として調査実施
- ・C B T (コンピューターベースでのテスト) による実施

(2) 実施・活用支援

- ・調査分析活用シート・個別支援シートの提供による各校での確実な活用
- ・調査分析活用シートに基づく36校への活用研修の実施